

内科学第二

1 構成員

	平成19年3月31日現在
教授	1人
助教授	1人
講師（うち病院籍）	2人（2人）
助手（うち病院籍）	5人（2人）
医員	5人
研修医	0人
特別研究員	0人
大学院学生（うち他講座から）	19人（0人）
研究生	0人
外国人客員研究員	0人
技術職員（教務職員を含む）	0人
その他（技術補佐員等）	9人
合 計	43人

2 教官の異動状況

中村 浩淑（教授）	（平成 9年 4月1日～現職）
千田 金吾（助教授）	（平成12年 2月1日～現職）
沖 隆（講師）	（平成12年 4月1日～現職）
佐々木茂和（講師）	（平成13年 6月1日～現職）
小林 良正（助手）	（平成 5年 4月1日～現職）
早田 謙一（助手）	（平成12年 8月1日～現職）
森田 浩（助手）	（平成 9年 9月1日～現職）
須田 隆文（助手）	（平成 8年10月1日～現職）
伊東 武志（助手）	（平成14年 1月1日～現職）

3 研究業績

数字は小数2位まで。

	平成18年度
(1) 原著論文数（うち邦文のもの）	17編（4編）
そのインパクトファクターの合計	37.64
(2) 論文形式のプロシーディングズ数	9編
(3) 総説数（うち邦文のもの）	29編（28編）
そのインパクトファクターの合計	2.34
(4) 著書数（うち邦文のもの）	16編（16編）

(5) 症例報告数 (うち邦文のもの)	8編 (6編)
そのインパクトファクターの合計	1.07

(1) 原著論文 (当該教室所属の者に下線)

A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

1. Iino K, Oki Y, Matsushita F, Yamashita M, Hayashi C, Miura K, Nishizawa S, Nakamura H : Immunohistochemical properties of silent corticotroph adenoma and Cushing's disease. Pituitary 10:35-45, 2007
2. Suda T, Fujisawa T, Enomoto N, Nakamura K, Inui N, Naito T, Hashimoto D, Sato J, Toyoshima M, Hashizume H, Chida K : Interstitial lung diseases associated with amyopathic dermatomyositis . Eur Respir J 28 (5) : 1005-1012,2006.
3. Sato M, Chida K, Suda T, Muramatsu H, Suzuki Y, Hashimoto H, Gemma H, Nakamura H : Recommended initial loading dose of teicoplanin, established by therapeutic drug monitoring, and outcome in terms of optimal trough level. J Infect Chemother 12(4) : 185-189,2006.
4. Shirai T, Inui N, Suda T, Chida K : Correlation between peripheral blood T-cell profiles and airway inflammation in atopic asthma. J Allergy Clin Immunol 118(3) : 622-626,2006.
5. Naito T, Hasegawa H, Asada K, Suda T, Chida K. : Lymphangitis carcinomatosa as a potential predictor for a response to gefitinib. Clin Oncol (R Coll Radiol) . 2006 Sep;18(7):573-4.
6. Naito T, Suda T, Yasuda K, Yamada T, Todate A, Tsuchiya T, Sato J, Chida K, Nakamura H. : A validation and potential modification of the pneumonia severity index in elderly patients with community-acquired pneumonia. J Am Geriatr Soc. 2006 Aug;54(8):1212-9.
7. Suda T, Hashizume H, Yokomura K, Sato J, Inui N, Nakamura Y, Fujisawa T, Enomoto N, Chida K : Management of interleukin-2-induced severe bronchoconstriction. Eur Respir J 29 (3) : 612-3. 2007.
8. Enomoto N, Suda T, Kato M, Kaida Y, Nakamura Y, Imokawa S, Ida M, Chida K: Quantitative analysis of fibroblastic foci in usual interstitial pneumonia. Chest. 2006 Jul; 130(1): 22-9
9. 千田金吾, 黄川田啓子, 岸本 肇, 山崎 晃, 妹川史朗, 小清水直樹, 渡辺春充, 松井 隆, 小川博示, 貝田勇介, 黒石重城, 白井正浩, 仲田千穂, 菅沼秀基, 戸館亮人, 永山雅晴 : 急性気道感染症に対する経口抗菌薬投与の意義について－マクロライド系薬とセフェム系薬の比較－. 日本医事新報(4289) : 62 - 67, 2006.
10. 藤澤朋幸, 鈴木研一郎, 横村光司, 松本一彦, 橋本久邦, 須田隆文, 千田金吾 : フルチカゾン吸入 (FP-DPI) 中の安定期気管支喘息患者においてブデゾニド吸入 (BUD-DPI) へ変更した際の適正吸入量の検討. アレルギー・免疫 13(9) : 68-75, 2006.
11. Honjo Y, Sasaki S, Kobayashi Y, Misawa H, Nakamura H : 1,25-dihydroxyvitamin D3 and its receptor inhibit the chenodeoxycholic acid-dependent transactivation by farnesoid X receptor. Journal of Endocrinology 188(3):635-643,2006.

インパクトファクターの小計 [30.78]

B. 筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの（学内の共同研究）

1. Uchida C, Miwa S, Isobe T, Kitagawa K, Hattori T, Oda T, Yasuda H, Kitagawa M. Effect of Mdm2-mediated downregulation of pRB. FEBS Lett 580(7): 1753-1758, 2006.

インパクトファクターの小計 [3.37]

C. 筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの

1. Zhao L F, Iwasaki Y, Oki Y, Tsugita M, Taguchi T, Nishiyama M, Takao T, Kambayashi M, Hashimoto K : Purinergic receptor ligands stimulate pro-opiomelanocortin gene expression in AtT-20 pituitary corticotroph cells. J Neuroendocrinol 18(4) : 273-278,2006.
2. Nishizawa S, Ohta S, Oki Y : Spontaneous resolution of diabetes insipidus after pituitary stalk sectioning during surgery for large craniopharyngioma. Endocrinological evaluation and clinical implications for surgical strategy. Neurol Med Chir (Tokyo)46(3) : 126-134,2006.
3. Miwa T, Tanaka K, Oki Y, Hiramane K, Kobayashi T, Iwahashi N, Kume M, Kanazawa M, Notoya Y, Odawara M : Detectable serum pro-opiomelanocortin-derived peptides in bromocriptine-sensitive Cushing disease. Endocrinologist 16(4) : 214-218,2006.
4. 杉山幸比古, 千田金吾, 小倉高志, 山口 哲, 宮崎邦夫 : びまん性肺疾患をどう診るか. 日本内科学会雑誌 95(6) : 1076-1093, 2006.
5. 成人成長ホルモン欠乏症患者の転帰及び診断, 治療に関する研究 日本人の下垂体機能低下症患者を対象としたQOL尺度の開発 (JAHQ), 島津 章, 千原和夫, 石井 均, 山城小百合, 肥塚直美, 田中敏章, 羽二生邦彦, 沖 隆, 加治秀介, 成長科学協会研究年報 (0386-7617) 29号 15-19

インパクトファクターの小計 [3.49]

(2) 論文形式のプロシーディングズ

A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

1. 中村浩淑 : 甲状腺ホルモン不応症の発症およびその病態に関する研究. 厚生労働科学研究費補助金難治性疾患克服研究事業. ホルモン受容機構異常に関する調査研究. 平成18年度研究報告書 49-51, 2007
2. ACTH分泌異常におけるGHRP-2負荷試験の有用性について, 沖 隆, 飯野和美, 山下美保, 林千雅, 松下文枝, 中村浩淑, ACTH RELATED PEPTIDES (1340-4512) 17巻 95-101
3. ACTH分泌調節機構におけるstore-operated channel (SOC) の関与, 山下美保, 沖 隆, 飯野和美, 林千雅, 中村浩淑, ACTH RELATED PEPTIDES(1340-4512) 17巻 59-64
4. 小澤雄一, 榎本紀之, 須田隆文, 千田金吾 : 肺癌に合併した間質性肺炎についての臨床的検討. 第73回間質性肺疾患研究会討議録. 2006. 68-74.
5. 千田金吾, 貝田勇介, 榎本紀之, 宮本康敬, 松本久邦, 須田隆文 : ステロイド投与例におけるシクロスポリン血中濃度の検討. 厚生労働科学研究 特発性間質性肺炎の画期的治療法に関する臨床研究 平成17年度研究報告書. 2006. 72-76.

6. 千田金吾, 右藤智啓, 中村裕太郎, 竹原康雄, 須田隆文: 間質性肺炎合併肺癌におけるMRI拡散強調画像 (diffusion weighted image;DWI) の有用性について. 厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患克服研究事業 びまん性肺疾患に関する調査研究班 平成18年度研究報告書. 2007. 77-81.

C. 筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの

1. デキサメサゾン投与によるネガティブフィードバック機構によりACTH precursorの抑制傾向を認めたプレクリニカルクッシング病の一例, 海老澤高憲, 東條克能, 赤司俊彦, 田嶋尚子, 神尾正己, 沖 隆, White Anne, ACTH RELATED PEPTIDES (1340-4512) 17巻 139-146
2. 成熟型ACTH (1-39) 産生ヒト細胞株 (DMS79-TM) の樹立, 館野透南勲, 土屋恭一郎, 泉山肇, 土井賢, 吉本貴宣, 沖 隆, 平田結喜緒, ACTH RELATED PEPTIDES (1340-4512) 17巻 65-70
3. 高橋弘毅, 千葉弘文, 林伸好, 大塚満雄, 工藤和実, 村上聖司, 白鳥正典, 須田隆文, 千田金吾: 皮膚筋炎合併間質性肺炎における抗SP-D自己抗体. 厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患克服研究事業 びまん性肺疾患に関する調査研究班 平成18年度研究報告書. 2007, 86-91.

(3) 総 説

A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

1. 中村浩淑: 甲状腺ホルモン不応症. 別冊日本臨牀 内分泌症候群 1 : 516-518, 2006.
2. 中村浩淑: 甲状腺中毒症. 別冊日本臨牀 内分泌症候群 1 : 231-234, 2006.
3. 松下明生, 中村浩淑: 下垂体性甲状腺機能低下症. 別冊日本臨牀 内分泌症候群 1 : 340-343, 2006.
4. 大場健司, 中村浩淑: しびれ 甲状腺機能低下症. 総合臨牀 55(9) : 2291-2295, 2006.
5. 中村浩淑: 重症疾患時に見られる甲状腺ホルモン異常 (Nonthyroidal illness) の本態: 最近の進歩. ホルモンと臨床 54(8) : 649-655, 2006.
6. 松下明生, 中村浩淑: Na・水調節における甲状腺ホルモンの役割. ホルモンと臨床 54 : 411-416, 2006.
7. 中村浩淑: EBMからみた使用法. 日本臨牀 64(12) : 2243-2248, 2006.
8. 中村浩淑: バセドウ病薬物治療のガイドライン. 日本臨牀 64(12) : 2189-2193, 2006.
9. 中村浩淑 (聞き手 齊藤郁夫): 内分泌疾患の新展開「バセドウ病の治療ガイドライン」. ドクターサロン 50(7) : 1-5, 2006.
10. 中村浩淑, 吉村弘, 深田修司, 田尻淳一, 上條桂一: 抗甲状腺薬の安全対策 - 無顆粒球症の対応について (座談会) Pharma Medica 24(12)65-71, 2006
11. 沖 隆: 【内分泌代謝領域における測定法の進歩と問題点】 ACTH・コルチゾール 機能をどこまで反映するか. 内分泌・糖尿病科 22(6) : 608-614, 2006.
12. 沖 隆: クッシング病の薬物治療. 日本医事新報(1280) : 89, 2006.
13. 沖 隆: 【内分泌性高血圧症 診断と治療の進歩】 内分泌性高血圧症の治療 下垂体性

Cushing症候群の内科的治療. 日本内科学会雑誌 95(4) : 683-688, 2006.

14. 沖 隆 : 【内分泌症候群 その他の内分泌疾患を含めて】視床下部・下垂体 下垂体機能低下症 Simmonds病. 日本臨床 別冊内分泌症候群 : 41-44, 2006.
15. 沖 隆 : 原発性アルドステロン症の最近の動向】 グルココルチコイド奏効性アルドステロン症の病態と治療. ホルモンと臨床 54(1) : 57-60, 2006.
16. 佐々木茂和, 川合弘太郎, 本城裕美子, 中村浩淑 : 甲状腺ホルモンと脂質代謝. 日本臨床 64(12) : 2323-2329, 2006.
17. 沖 隆, 山下美保, 林千雅, 飯野和美, 中村浩淑 : ACTHの測定間差異に関する検討(第三報). ACTH RELATED PEPTIDES 16 : 97-101, 2006.
18. 沖 隆, 岩崎泰正, 橋本浩三, 須田俊宏 : 下垂体機能低下症におけるACTH基礎値の解釈. ACTH RELATED PEPTIDES 16 : 13-19, 2006.
19. 飯野和美, 沖 隆 : 【ER・ICUでの薬の使い方Q&A プロの実践と秘訣に学ぶ】代謝・内分泌疾患の緊急治療 副腎皮質機能亢進症/副腎皮質機能低下症/急性副腎不全(クリーゼ). 救急・集中治療 18(7-8) : 1093-1098, 2006.
20. 黒石重城, 千田金吾 : 好中球エラスターゼ阻害剤(エラスポール)の治療効果. 呼吸器科 9(4) : 382-386. 2006.
21. 千田金吾 : 呼吸器感染症に対する経口抗菌薬の比較検討. 感染症と化学療法ラジオNIKKEIアボット感染症アワードダイジェスト版 : 2006.
22. 豊嶋幹生, 千田金吾 : NSAIDs過敏喘息の気道外病変. アレルギー免疫 14(1) : 56-61. 2007.
23. 井手協太郎, 千田金吾 : 【動物モデルから学んだこと・学ぶべきこと】BNラット喘息モデルの有用性とその限界. 喘息 20(1) : 63-67. 2007.
24. 千田金吾 : 【びまん性肺疾患 病態に基づいた最新治療】特発性間質性肺炎の分類と診断 特発性間質性肺炎の病型分類の変遷と現状とその問題点. 内科 99(2) : 223-228. 2007.
25. 須田隆文, 千田金吾, 大西一巧 : Imatinib (グリベック)による肺障害. 成人病と生活習慣病 37(3) : 357-362. 2007.
26. 中村祐太郎, 千田金吾 : 間質性肺炎の薬物療法の進め方 特発性間質性肺炎ーガイドラインに基づいてー. Medical Practice 24(6) : 1041-1047. 2007.
27. Kalinski P, Nakamura Y, Watchmaker P, Giermasz A, Muthuswamy R, Mailliard RB: Helper roles of NK and CD8+ T cells in the induction of tumor immunity. Polarized dendritic cells as cancer vaccines. Immunol. Res. 36(1-3):137-46, 2006.

インパクトファクターの小計 [2.34]

C. 筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの

1. 館野透, 南勲, 土屋恭一郎, 泉山肇, 土井賢, 吉本貴宣, 沖 隆, 長村義之, 平田結喜緒 : 異所性ACTH産生腫瘍で分泌される大分子型ACTHの解析. ACTH RELATED PEPTIDES 16 : 239-245, 2006.
2. 杉山幸比古, 千田金吾, 小倉高志, 山口哲, 宮崎邦夫 : びまん性肺疾患をどう診るか. 日本内科学会雑誌 95(6) : 1076-1093, 2006.

(4) 著 書

A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

1. 中村浩淑：Basedow病薬物治療の問題点－ガイドライン作成にむけて－. Annual Review 糖尿病・代謝・内分泌 2006. 金澤康徳, 武谷雄二, 関原久彦, 山田信博(編). 中外医学社, 2006, 220-226.
2. 中村浩淑：甲状腺機能亢進症. 今日の治療指針2006. 医学書院, 2006, 550-551.
3. 中村浩淑：「バセドウ病薬物治療のガイドライン2006」作成までと基本方針～ガイドラインはどのように使用されるべきか～. バセドウ病薬物治療のガイドライン2006. 日本甲状腺学会(編). 南江堂, 2006, 1-6.
4. 中村浩淑：第2章 バセドウ病の治療法 1. 薬物治療法. バセドウ病薬物治療のガイドライン2006. 日本甲状腺学会(編). 南江堂, 2006, 11-16.
5. 中村浩淑：第4章 抗甲状腺薬による治療法 1. 抗甲状腺薬の初期投与量. バセドウ病薬物治療のガイドライン2006. 日本甲状腺学会(編). 南江堂, 2006, 47-55.
6. 中村浩淑：第4章 抗甲状腺薬による治療法 2. 抗甲状腺薬の投与方法. バセドウ病薬物治療のガイドライン2006. 日本甲状腺学会(編). 南江堂, 2006, 56-60.
7. 中村浩淑, 吉村 弘, 伊藤公一：ASKA バセドウ病治療ガイドライン あすか製薬株式会社 2007
8. 中村浩淑：メタボリックシンドローム [生活習慣病] 【生きるということは いのち健やかに】 静岡新聞社 2007
9. 佐藤篤彦, 須田隆文：肺・胸膜. サルコイドーシスとその他の肉芽腫性疾患. 2006. 64-70.
10. 乾直輝, 千田金吾：シェーグレン症候群との合併. サルコイドーシスとその他の肉芽腫性疾患. 2006. 246-7.
11. 千田金吾：肉芽腫性疾患－Wegener肉芽腫症. 内科学I. 2006. 1005-1008.
12. 千田金吾：肉芽腫性疾患－肺Langerhans細胞組織球症 (肺好酸球性肉芽腫症). 内科学I. 2006. 1008-1010.
13. 千田金吾：特発性肺線維症 (IPF) に対して標準治療を行う場合の問題点. 別冊医学のあゆみ 218(9):755-759. 2006.
14. 千田金吾, 豊嶋幹生：膠原病性間質性肺炎4 強皮症. 治療学 40(11)：1185-1189, 2006.
15. 千田金吾：呼吸器系疾患の病態生理と治療薬. 器管別病態生理と治療薬., 2006, 579-630.
16. 千田金吾：特発性間質性肺炎. 図解呼吸器内科学テキスト. 長瀬隆英, 永田泰自(編). 中外医学社. 2006. 205-209.

(5) 症例報告

A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

1. 柄山正人, 乾直輝, 安井秀樹, 山崎佐和, 村松江里子, 右藤智啓, 森田悟, 朝田和博, 土屋

智義, 中野豊, 須田隆文, 千田金吾: 肺野末梢側に限局する陰影を呈したオウム病の一例. 日本呼吸器学会雑誌 44(9): 670-673, 2006.

2. 成瀬代士久, 乾直輝, 安井秀樹, 柄山正人, 山崎佐和, 村松江里子, 右藤智啓, 森田悟, 土屋智義, 中野豊, 榎本紀之, 妹川史朗, 須田隆文, 千田金吾: 急速に呼吸不全が進行した原発性シェーグレン症候群に伴った間質性肺炎の1例. 日本呼吸器学会雑誌 44(10): 721-726, 2006.
3. Naito T, Suda T, Saga K, Horii T, Chida K. Reactive Legionella pneumophila arthritis diagnosed by polymerase chain reaction. Rheumatol Int. 27(4): 415-416, 2007.
4. 小澤雄一, 須田隆文, 長谷川浩嗣, 野木村宏, 永山雅晴, 千田金吾: 局所温熱化学療法及び全身化学療法を行い長期生存し得た心膜原発性悪性中皮腫の1例. 肺癌 47(2): 137-142, 2007.
5. 影山富士人, 竹平安則, 山田正美, 室久剛, 片岡英樹, 佐野宗孝, 岩岡泰志, 川田一仁, 高橋百合美, 池谷真苗, 寺井智宏, 則武秀尚, 渡辺晋也, 菊正人, 西脇由朗, 小澤享史, 安見和彦: CA19-9高値を示し腫生検が必要であった自己免疫性膵炎の1例. 日本消化器病学会雑誌 103(1): 57-63, 2006.
6. Sumiyoshi S, Kikuyama M, Matsubayashi Y, Kageyama F, Ide Y, Kobayashi Y, Nakamura H: Carcinosarcoma of the liver with mesenchymal differentiation. World J Gastroenterol 13(7): 809-812, 2007

インパクトファクターの小計 [1.07]

C. 筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの

1. 松山泰, 豊嶋幹生, 須田隆文, 千田金吾: 肺病変を伴って再発した結節性多発動脈炎の1例 日本胸部臨床 65(5):484-488, 2006.
2. ACTH高値を示したGH・PRL同時産生腺腫の1例, 竹内瑞穂東條克能, 斉藤隆俊, 神尾正巳, 佐野壽昭, 沖 隆, 柴田洋孝, 田嶋尚子, ホルモンと臨床(0045-7167)55巻1号 85-89, 2007

インパクトファクターの小計 [0.00]

4 特許等の出願状況

	平成18年度
特許取得数 (出願中含む)	0件

5 医学研究費取得状況

	平成18年度
(1) 文部科学省科学研究費	2件 (320万円)
(2) 厚生科学研究費	3件 (320万円)
(3) 他政府機関による研究助成	0件 (0万円)
(4) 財団助成金	0件 (0万円)
(5) 受託研究または共同研究	14件 (645万400円)
(6) 奨学寄附金その他 (民間より)	55件 (3,258万円)

(1) 文部科学省科学研究費

千田金吾：ヒト肺胞上皮細胞の上皮＝間葉転換に関わる細胞周期制御の検討 170万円
 須田隆文：肺結核感染症に対する次世代粘膜ワクチンの開発 150万円

(2) 厚生科学研究費

中村浩淑：難治性疾患克服研究事業「ホルモン受容機構異常に関する調査研究」200万円
 千田金吾：難治性疾患克服研究事業「びまん性肺疾患に関する調査研究」40万円
 千田金吾：難治性疾患克服研究事業「特発性間質性肺炎の画期的治療法に関する臨床研究」
 80万円

(5) 受託研究または共同研究

研究担当者	委託者
千田金吾	大鵬薬品
千田金吾	第一製薬
千田金吾	エーザイ
沖 隆	日本ケミカルリサーチ
沖 隆	日本イーライリリー
沖 隆	三共
沖 隆	科研製薬
森田 浩	サノフィアベンティス
森田 浩	アステラス製薬
森田 浩	三共
小林良正	シュERINGプラウ
小林良正	三菱ウェルファーマ
小林良正	第一製薬
小林良正	第一製薬

7 学会活動

	国際学会	国内学会
(1) 特別講演・招待講演回数	1件	3件
(2) シンポジウム発表数	0件	7件
(3) 学会座長回数	0件	12件
(4) 学会開催回数	0件	0件
(5) 学会役員等回数	0件	20件
(6) 一般演題発表数	16件	

(1) 国際学会等開催・参加

2) 国際学会・会議等における基調講演・招待講演

1. Nakamura H.: (DAIICHI Prize Lecture) Negative regulation of thyrotropin β gene by thyroid hormone and its receptor. 8th Congress Asia & Oceania Thyroid Association

5) 一般発表

口頭発表

1. Naito T, Suda T, Yasuda K, Yamada T, Todate A, Tsuchiya T, Chida K : A Validation and Potential Modification of Pneumonia Severity Index in the Elderly Community-Acquired Pneumonia. 11th congress of the Asian pacific society of respirology. 2006.11. (Kyoto)

ポスター発表

1. Sasaki S, Nakamura H : The functions of Pit1 for the GATA2-dependent transactivation in the thyrotropin promoter. Annual meeting of American Thyroid Association.. (Phoenix, Arizona)
2. Yamashita M, Oki Y, Iino K, Hayashi C, Matsushita F, Nakamura H: The role of store-operated calcium channels in adrenocorticotropin release by rat anterior pituitary cell. The Endocrine Society. 2006.06. (Boston)
3. Tsuriya D, Morita H, Kawai K, Takahashi N, Ito T, Sasaki S, Oki Y, Nakamura H: Interaction of partial agonists of peroxisome proliferators-activated receptor γ (PPAR- γ) with ligands of RXR and mutual interaction between partial agonists of PPAR- γ on transcriptional activity. Annual meeting of American Diabetes Association. 2006.06 (Washington DC)
4. Fujisawa T, Suda T, Inui N, Sato J, Matsuda H, Toyoshima M, Tamura R, Nakano Y, Yasuda K, Gemma H, Hayakawa H, Chida K : Clinical Usefulness of Real-Time PCR for Diagnosis of Pneumocystis Pneumonia, Comparison with Conventional PCR. American Thoracic Society. 2006.05. (Sandiego, California)
5. Nakamura Y, Uchiyama H, Hayakawa H, Shirai M, Nakano Y, Gemma H, Suda T, Chida K: Cigarette Smoking Is the Major Cause of Acute Eosinophilic Pneumonia Syndrome. American Thoracic Society. 2006.05. (Sandiego, California)
6. Naito T, Suda T, Yasuda K, Yamada T, Todate A, Chida K : A Validation and Potential Modification of Pneumonia Severity Index in the Elderly Community-Acquired Pneumonia. American Thoracic Society. 2006.05. (Sandiego, California)
7. Nakano Y, Hayakawa H, Shirai M, Nakamura Y, Fujita K, Chida K, Suda T, Kuroishi S, Uchiyama H : The Usefulness of Ultrathin Bronchoscope in the Assessment of Pulmonary Peripheral Cavitary Lesions. American Thoracic Society. 2006.05. (Sandiego, California)
8. Miyazaki H, Horii T, Nagura O, Joko K, Suda T, Chida K : Diversity of Penicillin-Binding Proteins in β - lactamase-negative, ampicillin-resistant Haemophilus influenzae. International congress on infectious diseases. 2006.06. (Lisbon, Portugal)
9. Enomoto N, Nagata T, Suda T, Uchijima M, Chida K, Nakamura H, Koide Y : Immunization with dendritic cells pulsed with α -galactocylceramide and a dominant CTL epitope

- elicits effective protective immunity against intracellular bacterial infection. International congress on infectious diseases. 2006.06. (Lisbon, Portugal)
10. Koide Y, Hashimoto D, Uchijima M, Suda T, Chida K, Nagata T : Intratracheal administration of third-generation lentivirus vectors encoding MPT51 from M.tuberculosis induces lung-homing specific T cells . International congress on infectious diseases. 2006.06. (Lisbon, Portugal)
 11. Matsui T, Inui N, Fujisawa T, Enomoto N, Suda T, Chida K, Miyamoto Y, Takai N. Anti-endothelial cell antibodies in patients with idiopathic nonspecific interstitial pneumonia. of 16th Annual Congress of Munich, 2006. (Germany)
 12. Ozawa Y, Enomoto N, Naito T, Suda T, Nakano Y, Genma H, Yasuda K, Nagayama M, Ida M, Shirai T, Fujii M, Chida K : Incidence and Risk Factor of Lung Cancer in Patients with Idiopathic Pulmonary Fibrosis. 11th congress of the Asian pacific society of respiratory. 2006.11. (Kyoto)
 13. Enomoto N, Suda T, Kaida Y, Nakamura Y, Chida K: Direct Hemoperfusion with Polymixin B-immobilized Fiber (PMX-DHP) for Acute Exacerbation of Interstitial Pneumonia . 11th congress of the Asian pacific society of respiratory. 2006.11. (Kyoto)
 14. Naito T, Suda T, Yasuda K, Nakano Y, Hirata T, Nagayama M, Gemma H, Chida K : Lymphangitis carcinomatosa as a potential predictor for EGFR gene mutation and response to gefitinib in lung adenocarcinomas. The Joint Meeting of the 3rd International Society of Chemotherapy and the 11th International Symposium on Cancer Chemotherapy, 2006.12. (Tokyo)
 15. Matsushita M, Kobayashi Y, Nagasawa M, Takehira Y, Tsugiki M, Tamakoshi K, Nakajima T : Efficacy and Safety of Consensus Interferon Monotherapy for Chronic Hepatitis C. the 71st Annual Scientific Meeting, American College of Gastroenterology. 2006.10. (Las Vegas)

(2) 国内学会の開催・参加

2) 学会における特別講演・招待講演

1. 中村浩淑：「甲状腺中毒症の診断と治療」平成19年度 日本内科学会生涯教育講演会（大阪）
2007.02
2. 中村浩淑：「バセドウ病の薬物治療について」 第201回 日本内科学会東海地方会 生涯教育講演（津） 2007.02
3. 沖 隆：「先端巨大症のテーラーメイド医療を目指して」 第82回日本内分泌学会学術総会ランチョンセミナー（神戸）

3) シンポジウム発表

1. 中村浩淑：「バセドウ病の薬物治療:抗甲状腺薬の選択と初期投与量」 第79回日本内分泌学会総会. 2006. 07. (神戸)
2. 中村浩淑：「バセドウ病の薬物治療」 第49回日本甲状腺学会総会. 2006. 11. (高松)

3. 沖 隆：Cushing症候群の診断と治療における問題点と今後の展望 Cushing症候群 (Preclinicalを含む) 第82回日本内分泌学会学術総会 (神戸)
4. 沖 隆：現在におけるCushing病の病態・診断・治療, 第18回日本間脳下垂体腫瘍学会 (山形)
5. 沖 隆：Cushing症候群における副腎内グルココルチコイド受容体の発現について, 第82回日本内分泌学会学術総会 (神戸)
6. 小澤雄一：第47回日本肺癌学会総会
7. 白井敏博：第18回日本アレルギー学会総会

4) 座長をした学会名

1. 中村浩淑：第79回日本内分泌学会総会
2. 中村浩淑：第49回日本甲状腺学会総会.
3. 沖 隆：第79回日本内分泌学会総会
4. 沖 隆：第17回臨床内分泌代謝Update
5. 沖 隆：第199回日本内科学会東海地方会
6. 佐々木茂和：第79回日本内分泌学会総会
7. 佐々木茂和：第49回日本甲状腺学会総会
8. 森田 浩：第74回日本糖尿病学会中部地方会
9. 森田 浩：第75回日本糖尿病学会中部地方会
10. 千田金吾：第47回日本肺癌学会総会
11. 千田金吾：第46回日本呼吸器学会総会
12. 小林良正：第199回日本内科学会東海地方会

(3) 役職についている国際・国内学会名とその役割

1. 中村浩淑：日本内科学会 評議員
2. 中村浩淑：日本甲状腺学会 監事
3. 中村浩淑：日本内分泌学会 代議員
4. 中村浩淑：日本臨床代謝学会 評議員
5. 中村浩淑：日本ステロイド学会 評議員
6. 沖 隆：日本内分泌学会 代議員
7. 沖 隆：日本神経内分泌学会 評議員
8. 沖 隆：日本ステロイド学会 評議員
9. 沖 隆：日本間脳下垂体腫瘍学会 理事
10. 沖 隆：CRH・ACTH研究会 幹事
11. 沖 隆：副腎腫瘍研究会 世話人
12. 佐々木茂和：日本甲状腺学会 評議員
13. 佐々木茂和：日本内分泌学会 代議員
14. 森田 浩：日本糖尿病学会 学術評議員

- 15. 千田金吾 : 日本呼吸器学会 代議員
- 16. 千田金吾 : 日本肺癌学会 評議員
- 17. 千田金吾 : 日本サルコイドーシス学会 理事
- 18. 千田金吾 : 気管支内視鏡学会 評議員
- 19. 須田隆文 : 気管支内視鏡学会 評議員
- 20. 小林良正 : 日本肝臓学会東部会 評議員

8 学術雑誌の編集への貢献

	国内	外国
学術雑誌編集数（レフリース数は除く）	3件	0件

(1) 国内の英文雑誌の編集

- 1. 千田金吾：日本呼吸器学会誌
- 2. 千田金吾：日本呼吸器内視鏡学会誌
- 3. 千田金吾：肺癌

(3) 国内外の英文雑誌のレフリース

- 佐々木茂和：1回 Endocrine Journal (Japan)
- 沖 隆 : 8回 Endocrine Journal (Japan)
- 千田金吾 : 3回 Respiriology,
- 千田金吾 : 3回 Internal Medicine
- 須田隆文 : 1回 Respiriology
- 須田隆文 : 1回 Sarcoidosis

9 共同研究の実施状況

	平成18年度
(1) 国際共同研究	0件
(2) 国内共同研究	0件
(3) 学内共同研究	3件

(3) 学内共同研究

薬物動態に及ぼす内分泌機能（臨床薬理学）

樹状細胞を用いた細胞内寄生菌に対するワクチンの開発（微生物学）

レンチウイルスを用いた結核感染症に対する経気道的粘膜ワクチンの開発（微生物）

10 産学共同研究

	平成18年度
産学共同研究	0件

11 受賞

(1) 国際的な授賞

中村浩淑：アジア・オセアニア甲状腺学会賞（DAIICHI Prize）Asia & Oceania Thyroid Association

(3) 国内での受賞

長山浩士：日本甲状腺学会若手奨励賞 平成18年11月4日

12 研究プロジェクト及びこの期間中の研究成果概要

内分泌・代謝内科

1. 甲状腺ホルモン・甲状腺ホルモン受容体によるTSH遺伝子の転写抑制機構の解明

甲状腺ホルモン受容体(TR)がホルモン(T3)依存性に甲状腺刺激ホルモン(TSH)遺伝子の転写を抑制する過程は、甲状腺ホルモンの恒常性維持にもっとも重要な制御機構であり、その異常は甲状腺ホルモン不応症を引き起こすため、内分泌グループのメインテーマとして精力的に研究を続けている。これまでの成果は次のようにまとめられる。①TSH β 遺伝子の転写活性化因子は下垂体TSH産生細胞の分化に必須の転写因子であるGATA2である。②TRはT3非依存性にGATA2に直接結合して複合体をなし、ヒストン脱アセチル化酵素(HDAC3)をリクルートする。③TRAP220が複合体に会合し、TSH β 遺伝子の転写活性化に関与する。また負調節にも重要な役割を果たしている。④HDAC3とTRAP220は異なる時相で作用しており、T3がTRに結合した後、HDAC3によるヒストン脱アセチル化が生じ、その後TRAP220が複合体から離脱する。⑤TRのDNA結合領域は重要であるが、TRはTSH β 遺伝子プロモーター上には結合しない。従来negative TREとして提唱されてきた領域は関係しない。これら一連のデータをまとめ、2007年にアメリカ内分泌学会誌にて発表した (Matsushita et al. Essential role of GATA2 in the negative regulation of thyrotropin beta gene by thyroid hormone and its receptors. Mol Endocrinol 21:865, 2007)。

さらに通常の条件下では、TSH β 遺伝子の発現にPit1とGATA2が関与するため、Pit1の機能を追求した。その結果、①TSH β プロモーター上にはGATA2の作用を阻害する未知の因子が結合している。②Pit1はGATA2と結合し複合体をなすことにより、この阻害因子からGATA2を保護している。③Pit1によるGATA2の保護作用が発揮されるには、両者の相対的な位置関係が重要で、極めて厳密に規定されている。などの興味深い事実が分かった。これらのデータは現在Biochem Jに投稿中である。

TSH β 遺伝子活性は、エストロゲン(E2)とエストロゲン受容体(ER α)によっても抑制を受ける。その機序は細部では差異があるものの基本的にはT3/TRによる抑制機序に類似している。これも現在投稿を準備している。

(研究担当者：佐々木茂和，松下明生，長山浩士，三澤啓子，中村浩淑)

2. Thyrotropin-releasing hormone (TRH) によるTSH β 鎖遺伝子の転写活性化機構

TRH/TRH受容体はTSH β 遺伝子活性を増強するがその機序は未解明であり、分子生物学的機序を検討している。現在までに明らかになったのは以下の点である。①TRHによる活性増強

作用にもGATA2が中心的働きをしている。とくにGATA2のZnフィンガー領域が重要である。②TRHはプロテインキナーゼC (PKC) の活性化を介し作用を発揮する。GATA2のZnフィンガー領域にはセリン残基が存在するが、これを置換しても影響はなく、TRH-PKC系が直接GATA2をリン酸化して活性化能を増強するものではない。③TRAP220はGATA2 Znフィンガー領域と結合する。TRAP220が重要な役割を果たしているであろうと考えられる。

(研究担当者：大場健司，佐々木茂和，中村浩淑)

3. 甲状腺ホルモン・甲状腺ホルモン受容体による心筋ミオシン重鎖 β および2型 脱ヨード酵素の転写抑制機構

甲状腺ホルモンは心機能と密接に関連する。心筋収縮の主体であるミオシン重鎖 (MHC) には α と β のアイソザイムがあり、ヒトでは80-95%がMHC β ，5%程度がMHC α である。T3はMHC α を増加させ、一方MHC β を低下させるが、その機序、とくにMHC β を低下させる機序は不明である。これを解明するための実験系を組み立てた。すなわち、MEF2Cは心臓の初期発生に関与する転写因子であるが、これをCV1細胞に導入すると、MHC β 遺伝子プロモーターが活性化される。このMEF2C依存性MHC β 遺伝子転写活性は、T3/TRで抑制された。この系で転写抑制に関わる因子の検討を進めている。

また2型 脱ヨード酵素 (D2)はT4からT3への変換をになう酵素で、T3で抑制される。生理的条件下で血中T3濃度を規定しているとして近年とみに注目されているが、転写制御機構は不明である。D2遺伝子プロモーターを含むレポーター遺伝子を作成、CV1細胞の系を用いて検討を始めた。D2遺伝子はTSH β 遺伝子同様、GATA2単独で活性化され、T3結合TRによって抑制を受けることが判明した。D2プロモーターにはPit1結合配列が推定されているが、Pit1は影響しない。現在プロモーター領域の欠失実験を行い、GATA2結合配列の特定を行っている。

(研究担当者：岩鬼裕之，松永英之，佐々木茂和，中村浩淑)

4. ACTH産生下垂体腺腫の増殖能に関する検討

クッシング病の原因であるACTH産生下垂体腺腫には、ミクロアデノーマとマクロアデノーマが存在し、少なからずACTH産生能についても差異を認める。腫瘍サイズの差異について、細胞増殖に関与する細胞内情報伝達機構としてArkに注目して検討を行っている。

また、マクロアデノーマではPOMCプロセッシングが異なることから、PC2との関連性についても検討している。

(研究担当者：飯野和美，沖 隆)

5. グルココルチコイドのACTH分泌抑制におけるERG-Kチャンネルの関与

グルココルチコイド (GC) によるラット下垂体からのACTH分泌抑制機構のうち早期 (1時間以内)に見られる現象を解明する目的で、膜電位の制御に係わるKチャンネルについて検討を行ったところ、ERG-Kチャンネル阻害薬によってGCによるACTH抑制が見られなくなった。これは、GCがACTH産生細胞においてERG-Kチャンネルの開口を介して膜脱分極を抑制し、ACTH分泌抑制に作用している可能性を示した。

(研究担当者：山下美保，沖 隆)

6. ACTHによるステロイド合成促進機構におけるSOCチャンネルの関与

これまで、ACTHによる副腎皮質からのグルココルチコイド産生にcAMPが重要な働きを有することは知られている。通常、cAMP系においてstore-operated calcium channel (SOC) の関与は知られていないが、偶発的にSOC阻害薬がACTHによるラット副腎皮質束状層細胞からのコルチコステロン分泌促進作用を抑制することを見いだした。これまでに報告されていない機構であり、今後さらに検討する。

(研究担当者：林 千雅，飯野和美，沖 隆)

7. 糖代謝，脂質代謝：PPAR- γ のfull agonist およびpartial agonistの相互作用

脂肪細胞分化およびインスリン抵抗性に関与する転写因子PPAR- γ のリガンドであるチアゾリジン誘導体とそのpartial agonistとして最近報告されているアンジオテンシン受容体拮抗薬のtelmisartanや抗糖尿病薬であるglimepirideのPPAR- γ 活性化における相互作用について検討中である。これらの薬剤は実際の臨床で用いられているが、同時に投与されたときには相乗作用や一部拮抗作用を有する可能性がある。これらの相互作用を細胞培養系および動物実験において検討し、実際の臨床での有用性について検討を進めている。

(研究担当者：釣谷大輔，森田 浩，伊東武志，佐々木茂和，中村浩淑)

8. CYP3A4活性に及ぼす甲状腺機能の影響

CYP3A4は主に肝臓に発現する薬物代謝酵素であるが、その発現は核内受容体Pregnane X Receptor (PXR) によってリガンド依存性に転写レベルで調節されることが知られている。一方、肝臓は甲状腺ホルモンの代表的な標的臓器であり、甲状腺ホルモンがその発現調節に関与している可能性がある。現在、CYP3A4の発現に対する甲状腺ホルモンの影響をin vitro, in vivoで検討中である。

(研究担当者：高橋典男，森田 浩，佐々木茂和，中村浩淑)

呼吸器内科

1. 肺内樹状細胞の特異的IgA誘導能

粘膜面に存在する樹状細胞 (mucosal DC) は、粘膜免疫の主要な防御抗体である抗原特異的IgA抗体の誘導能が優れていることが腸管などの研究で明らかにされている。しかし、肺において肺内樹状細胞が強いIgA抗体誘導能を持つかどうかはわかっていない。そこで、OVA-transgenic mouse由来のT細胞をもちいて、naïve B細胞と、肺内樹状細胞、または脾樹状細胞と共培養することによって、OVA特異的なIgA抗体の誘導能を検討したところ、肺内樹状細胞はIgA抗体の誘導能が強いことが明らかとなった。肺内の抗原提示細胞である肺胞マクロファージはほとんどIgA抗体の産生を誘導できなかった。以上より、肺内樹状細胞は肺内にIgA抗体を誘導する主要な抗原提示細胞であることが明らかになった。

(研究担当者：内藤立暁，須田隆文)

2. Alpha-GalCerを用いた樹状細胞ワクチンの効果の増強

NKT細胞のligandであるalpha-GalCerを樹状細胞ワクチンに添加することによって、NKT細胞の活性化を介して、そのワクチン効果が増強されることをリステリア感染モデルで明らかにした。

(研究担当者：榎本紀之，千田金吾)

3. CYP2A6遺伝子多型がテガフルール・ギメラシル・オテラシルカリウム配合剤 (TS-1) の薬物作用に及ぼす影響の検討

CYP2A6には20以上の遺伝子多型があり、薬物代謝酵素活性が低下、欠損する型が存在する。TS-1は5-FUのプロドラッグであるテガフルールにギメラルルおよびオテラシルカリウムを配合することにより血中及び腫瘍内5-FU濃度を高めて、抗腫瘍効果を増強した薬剤である。テガフルールは主としてCYP2A6の作用により5-FUに変換されるため、CYP2A6の遺伝子多型とテガフルールの薬物代謝の関係を理解することは本剤を用いたテーラーメイド治療の助けになる。そこで、肺癌症例を対象として、TS-1を投与し、血中テガフルール及び5-FU濃度を測定し、遺伝子多型とTS-1の薬物動態、臨床効果との関連を明らかにする。

(研究担当者：貝田勇介，乾直輝)

4. TGF- β による上皮間葉転換 (epithelial mesenchymal transition, EMT) の研究

気管支喘息の主たる病態である気道リモデリングが形成される機序を解明するために、気道上皮細胞がEMTをおこし、間葉系細胞に変化する可能性を、マウス気道上皮細胞のair-liquid interface培養系を用いて検討する。

(研究担当者：黒石重城，藤澤朋幸)

肝臓内科

1. 非アルコール性脂肪性肝障害に対するピオグリタゾンの治療効果

非アルコール性脂肪性肝障害 (NAFLD) は、肝障害を惹起する程度のアアルコール摂取歴がなくウイルス性肝炎や自己免疫性肝炎などの原因の明らかなものを除外した肝への脂肪沈着を認める肝疾患である。この疾患は、従来の過栄養性脂肪肝に相当するが、これまで予後良好な疾患と認識されていたことから、積極的な薬物療法の対象とはならなかった。しかしながら、最近、NAFLDに肝硬変や肝臓へ進展する予後不良な疾患群である非アルコール性脂肪性肝炎 (NASH) が含まれていることが明らかとなり、薬物療法による治療介入の必要性が言われるようになった。NAFLDには、その背景にインスリン抵抗性があることから、薬物治療にはインスリン抵抗性改善剤が期待され、これまでに欧米よりチアゾリジン系インスリン抵抗性改善剤による治療効果が報告されて来ている。しかしながら、治療効果予測因子や長期効果に関しては十分検討されていない。そこで、私たちはNAFLD患者40症例を対象にチアゾリジン系インスリン抵抗性改善剤ピオグリタゾンの治療効果を検討することとした。投与開始3か月後における初期治療効果に関しては、トランスアミナーゼの明らかな改善とともに、HbA1c、空腹時血糖およびインスリン値、HOMA指数の低下が認められ、脂質系では、中性脂肪と遊離脂肪酸の低下とHDLコレステロールの増加がみられた。この間、有害事象として肝機能異常の増悪、明らかな体重増加や浮腫はみられなかつ

た。以上より、NAFLDに対するピオグリタゾン投与は極めて有用であると考えられ、今後、長期投与による治療効果と有害事象、さらに治療効果規定因子の検討も行いたい。

(研究担当者：小林良正，高橋百合美)

2. ウィルス性慢性肝炎におけるDNA塩基除去修復機構の破綻と肝発癌

肝細胞癌症例の70%以上が、B型肝炎ウイルス（HBV）あるいはC型肝炎ウイルス（HCV）に関連したものであり、これら2種のウイルスが最も重要な肝発癌因子とみなされている。しかしながら、HBV、HCVとも、肝炎ウイルスが存在するだけでは発癌に至らず、慢性炎症が持続して初めて高率に発癌することから、肝炎による肝細胞死とそれに引き続く再生を繰り返すうちに、発癌にcriticalな遺伝子変異が引き起こされるのではないかと推測されている。しかしながら、生体では傷害されたDNAを修復する機構も備えられており、その修復機構の破綻により発癌することも知られている。そこで、今回はDNA修復機構のなかでも塩基除去修復に関わる主要な蛋白であるapurinic/apyrimidinic endonuclease 1（APE1）についてB型およびC型慢性肝炎の肝組織における発現を検討した。B型慢性肝炎の肝組織におけるAPE1の発現は、C型慢性肝炎と比較して、蛋白レベルおよびmRNAレベルにおいて明らかに低下していた。一方、C型慢性肝炎におけるAPE1の発現は、非ウィルス性慢性肝疾患である自己免疫性肝炎や原発性胆汁性肝硬変と同等であったことから、B型慢性肝炎の肝組織において、特異的にAPE1の発現が低下していることが明らかとなった。今後は、HBVのウイルス蛋白がAPE1の転写活性に及ぼす影響について検討したい。また、APE1がDNAの脱塩基部位を修復することから、APE1の発現低下は、DNAの脱塩基部位を増加させることが予想され、B型慢性肝炎の肝組織における脱塩基部位の定量評価も行いたい。

(研究担当者：小林良正，住吉信一)

13 この期間中の特筆すべき業績、新技術の開発

1. 従来まったく分かっていなかった甲状腺ホルモン受容体（TR）がホルモン（T3）依存性に甲状腺刺激ホルモン（TSH）を抑制する機序を、はじめて分子レベルで解明し、作用機序のモデルを打ち立てた。
2. TGF- β が、上記培養系において、濃度依存性、時間依存性に、マウス気道上皮細胞の間葉転換をおこすことをはじめて証明した。

14 研究の独創性、国際性、継続性、応用性

1. 甲状腺ホルモンの恒常性を維持する上で、甲状腺を刺激するTSHがT3/TRによって抑制されることが最も重要なステップである。しかしその重要性にもかかわらず、実験系の困難さからこれまでほとんど研究はなされてこなかった。我々は、転写因子pit 1, GATA2を導入することにより、遺伝子実験に適した培養細胞でTSH遺伝子活性を発現させ、転写抑制を調べることが出来る高感度の実験系を組み立てることに成功した。この系を用いてTSH β 遺伝子の活性化因子がGATA2であることを発見した。TSHの転写抑制機構の研究では我々の研究が世界でもっとも進んでいる。また甲状腺ホルモン不応症に関しては、中村浩淑が厚生労働省難

病情報センターの情報企画委員であり、我々の研究室が日本における中心的機関として機能している。全国から症例の相談、TR遺伝子検索の依頼を受けている。

2. 当教室では気道の粘膜免疫の研究を積極的に行っており、特に、生体において最も強力な抗原提示細胞である樹状細胞に着目し、肺の免疫応答における肺内樹状細胞の役割を解明するための研究を積極的に行っている。また、遺伝子導入した樹状細胞を用いて結核などの肺感染症に対する次世代ワクチンとしての有用性も検討している。肺におけるこの分野の研究は国際的にも限られた施設でしか行われていないが、将来的に各種感染症やアレルギー性肺疾患の治療としての応用が期待でき、意義のある研究テーマと考えられる。

15 新聞、雑誌等による報道

1. 中村浩淑：中日新聞 2006年6月18日 朝刊「バセドウ病治療 即戦力の手引き書 日本甲状腺学会が出版 浜松医大中村教授 データで裏打ち」
2. 中村浩淑：静岡新聞 2006年11月5日 朝刊「内臓脂肪症候群を解説」
3. 中村浩淑：静岡新聞 2007年1月25日 夕刊「バセドウ病適切治療を 浜松医大中村教授らガイドライン作成 注意呼びかけ」
4. 中村浩淑：Medical Tribune 2007年2月22日「第49回日本甲状腺学会 MMIの無顆粒球症発症頻度の全国調査を計画 浜松医大中村教授」
5. 小林良正：中日新聞 2007年3月10日『肝癌の早期発見と予防について』市民公開講座で講演